ブロンズ像のある街
宇奈月温泉

❶森のそよぎ

しなやかな肢体に緊張をはらみ、直線的なフォルムをさらに鋭く見せている一頭の鹿。その表情も何かに注意を払っているかのようで、耳もピンと立ち、一点をじっと見つめています。余分なものをそぎ落とした全身は、あくまで優雅でかろやかな力強さと、命のリズムがその中に張りつめていることを感じさせてくれます。森で会った次の瞬間、わたしたちにうれしさと感動を残して、さっと森の奥にきえていきそうです。

❷永遠の愛

熊谷喜美子

子供が好奇心いっぱいに手を伸ばす先には小鳥がとまっています。母性の象徴でしょうか。女性は片方の乳房をあらわにし、片手をそっと子供に添えています。その女性の腕から、子供の腕、そして小鳥、女性の顔へと、自然に円を描く動きが、この像に安定感と、楽し気な雰囲気を与えています。親は子を見つめ、子は小鳥に夢中。　いつの世も親の心子知らずですが、そこにいるだけで幸せなのかもしれませんね。

作者は1948年（昭和23年）富山県射水市生まれ。日展会員

❸森の王者

石の台座の上で四肢に力をみなぎらせ、大地を踏みしめるライオン。威嚇のため開かれた口、うねるたてがみ、尾はまっすぐにのばされています。題名通り、まさに王者の風格。人に比べて小さいながら迫力充分です。さて、ライオンは古代エジプトの昔から、王権の象徴にして聖域の守護者です。神社にいるのも、実は獅子と狛犬のペアなんですよ。向かって右が獅子で、阿吽の阿。すなわち口を開いているのです。駅に置かれたライオン君。宇奈月を守ってくださいね。

❹夢

北村西望

目を閉じ、腕をかかえこんで座るこの女性。眠っているのでしょうか？ その頭上には蝶が・・・

幻想的で美しい風景です。タイトルの「夢」ときて、ことに蝶とくれば、荘子の「夢に胡蝶となる」が思い浮かびます。夢と現実、どちらが本当なのでしょうか？ 荘子によれば、根本的な原理である「道」から見れば、万物は変化するものであるから、どっちも本当ということですよ。せめてあなたは、このひととき、宇奈月のお湯につかって、浮世のことはお忘れください。

作者は1884年、長崎県生まれ。東京美術学校彫刻科卒業。原爆を受けた長崎に設置された「平和の像念像」で知られる。1958（昭和33）年、文化勲章受章。1987（昭和62）年、104歳にて逝去。

❺エンゼル

温泉街に置かれたブロンズ像の中でもひときわかわいらしい作品です。弓をかまえた、あどけない表情に、むしろおどけていると言ってもいいポーズ。

ローマ神話では、クピド（キューピット）は美の女神ウェヌス（ヴィーナス）の息子。子供の姿でありながら、射られれば神々でも逆らえない「恋の矢」の持ち主。愛とは子供の気まぐれさに似たもの、と昔の人は考えたのかもしれませんね。まさに無責任なこの顔。ちょっと正面から見てみてくださいよ。いっそあっぱれなほどです。さてさて、誰を狙っているのでしょうか。

❻花つみ

きっぱりとした顔立ちの西洋女性。全体に細く鋭い印象です。片手に花かごを持ち、帽子にも花が飾られていますが、この冷たい表情。何を考えられているんですかね？ いやいや、むしろあきれ顔？

その視線の先には、おちゃめな婚約者が彼女を驚かそうと屋根の上でパフォーマンス中なのです・・・なんて想像をしてみるのも一興かも。

しかもこの服、合わせ目が左右対称ですけど、いったいどうやって着るんでしょう？ 小さいながら、なかなか謎に満ちた像なのです。

ブロンズ像のある街
宇奈月温泉

⑦⑧兄と妹

林　清史

木陰に立つ2体のブロンズ像は、どこか寂しげです。
服の合わせ目を頼りなげに持つ妹と、どこか虚ろな表情で上を見ながら、落ち着きなく足を組み合わせる兄。なんだか叱られる直前のようにも感じられますが、どんなシーンでしょうか。う〜ん・・・遊んじゃだめと言われていた川に二人で遊びに行っておっこちちゃった妹。兄はそれを助けましたが、濡れた服では、もうごまかしようもなく・・・。それともただ、彫刻家の前で緊張している二人のようにも見えますね。あなたのご意見は?

⑨巣立ち

鳩を大空へとかかげ、羽ばたかせようとする少年。
怪我をした鳩を介抱し、今、放そうとしているのでしょうか。飛び立つ鳩は、そのまま少年自身の成長と子供時代への別れを暗示しています。健やかな明るさが表された、素直な少年像です。

⑩裸のインファント

これは・・・小便小僧ですよね?だったらもう何も言うことはありません。
本家本元は、ベルギーのブリュッセル市庁舎にあります。町の城壁を破壊しようとしていた爆弾の導火線に、小便をかけて消し、町を救ったジュリアン坊やです。

⑪うさぎを抱く少女

田畑　功

ウサギを抱え込み、大きな目を見開く少女。うれしいような、悲しいような不思議な表情です。ウサギは腕の中でどっしりと安住中。この足の組み方はバレリーナ?
それにしても、でっかい目ですね。
作者は、1955（昭和30）年、富山県高岡市生まれ。日展会友。

⑫たわむれ

石黒孫七

ひときわ小さくかわいらしいブロンズ像です。手足にとまった小鳥たちと少女との語らい。その楽しげなひとときを、簡略化した造形の中から的確に伝えてくれる魅力的な小僧です。

⑬いとしみ

満面の笑みで、いとしげにウサギを抱きしめる少女。
踊るスカートのひだ、今にもスキップしそうな足、全身で喜びを表現しています。
少女の愛と喜びがこめられた一体。でも目がこわいのです。

ブロンズ像のある街
宇奈月温泉

⑭あこがれ

う？ 鶴ですよね？
羽をかかげた、なかなかいいポーズ。すみません、他に言うことはありません。
後ろから見ると、けっこうかわいいです。
あなたが、タイトルをつけるとしたら、何にしますか？

⑮はじらい

これまた不思議なポーズです。
片脚を台の上にあげた女性。顔もなんだかしかめっつらです。
さてさて、どういうポーズなのでしょうか。
やっぱり女性像は・・・（以下略）

⑯仲良し

仲良く寄り添い、空を見上げるペンギン。
デザイン化された大中小の三羽は、おなかをくっつけ日光浴です。
たまごのように無垢でかわいい君たち。
これからも仲良くね。

⑰鯉を抱く童子

米　治一

この鯉のびっくりした顔！ 満足げに鯉を抱え込んでいる少年・・・というより、やはり「童子」の方がふさわしいですね。像の後ろに回って大発見。台座の後ろにも小さな穴がありま す。これって噴水として作られたんじゃ？ ちょっと水の出ているところを想像してみる・・・。うーん、陸にあげられ、水まで吐き出させれれている鯉がちょっとかわいそう。でもかわいらしい作品です。

作者は1896（明治29）年、高岡生まれ。東京美術学校彫刻科卒業。高村光雲に師事。1968（昭和43）年、富山県功労者表彰。1985（昭和60）年逝去。

⑱まなざし

林　健

木陰にたたずむ金色魔人。いや失礼。帽子を小粋にかぶったご婦人です。
ダンスショーの出演者でしょうか、その立ち姿はどっしりとした安定感とプロ根性を感じさせてくれます。ポーズも決まっていて、絶対素人じゃありません。
フフフ・・・よく見破ったわね明智君、と言い出してもおかしくない、ふてぶてしい落ちつきぶりです

⑲まつり

清河宗翠

法被を着て、お面をひっかけ、ウチワを構えた完璧なお祭りスタイルの子供。そのワクワクする気持ちを表した作品です。なにやら一生懸命な彼ですが、どんなシーンでしょうか。うーん、この子のポーズから推測するに、もともと彼が持っていたのは、ウチワじゃなくて、風車（かざくるま）だったんじゃないかなぁ？ それを吹いて回しているように見えますネ。あなたにはどう見えますか？ 作者は1947（昭和22）年富山県黒部市（旧宇奈月町）生まれ

ブロンズ像のある街 宇奈月温泉

⑳帽子の少女

林　清史

なんだか怒ったような顔をして帽子をしっかり抱く少女。
お気に入りの帽子を、妹に貸してあげなさいとお母さんに言われて、いやって言っているところ・・・なんてね。
あるいは、何か大切なものを隠して、それを一生懸命守っているところかな?
さあ、この中には何があるのでしょうか。

㉑将軍の孫

北村西望

だぶだぶの軍靴をはいて、敬礼（もどき）をする子供。あどけない表情で、精一杯ポーズをとっています。
これは作者が、日露戦争で殉死した橘中佐の銅像制作の依頼を受け、モチーフの軍靴をアトリエに置いていたところ、当時5歳だった長男が遊んでおり、父に見つかった彼が思わずとった姿ということです。ほほえましい一家のエピソードから生まれた作品です。

㉒好日

富永直樹

猫をひざに乗せ、優雅なひとときを楽しむ婦人。イスはデッキチェアのようで、庭でのひなたぼっこの情景でしょうか。端整で落ち着いた婦人の表情と、猫の寝そべった様子がいっそう穏やかです。ほとんど動きはありませんが、猫を抱いた手の高さの違いと、猫の前足、後足の組み合わせが、ひっそりとした動きを感じさせ、ほのぼのとしたくつろぎと、おかしみを演出しているようです。
作者は1913（大正2）年、長崎県生まれ。1980（昭和55）年、第12回日展に「好日」を出品。1989（平成元）年、文化勲章受章。2006（平成18）年、92歳にて逝去

㉓ポンチョ

田中　昭

ポンチョは南米のインディオの民族衣装。布の中央に穴をあけ、そこに首を通して着る外衣です。その服を、両手で広げて見せているのですが、なんとなく、この女の子の髪型や、手の広げ方の所在無げな様子から、現地でモデルを見つけたのではなく、自分の子供か孫に着せてモデルにしたのではないかと思われます。
この安定した形の中にあるアンバランスさによって、作品に深みと動きが醸されているようです。
1929（昭和4）年、富山県氷見市生まれ。金沢美術工芸大学卒業。日展評議員。

㉔陽光　川岸要吉

巨大な円環の中、両手をかかげて立つ若い男性像。
宇奈月温泉に置かれているブロンズ像の中では珍しく大きな像です。円の中で足を開き、力強く手を差し伸べるその様は、太陽の恩恵を享受しているのでしょうか。若々しい表情と肢体は、これから訪れる無限の未来と希望に向かって開かれているかのようです。
作者は1931（昭和6）年、石川県穴水町生まれ。日展会員。2003（平成15）年、71歳にて逝去

㉖ファッション

浦山一雄

優雅なドレスを身にまとい、ポーズをとる女性。すそを持ち上げて足元をあらわにし、静かに目を閉じています。ドレスのすそと手、そして足によって生み出された動きのある下半身と、真正面を向き、沈思しているかのような上半身の危うさが、細長い造形に不思議な魅力を与えています。
作者は1933（昭和8）年、富山県黒部市生まれ。日展評議員。